

〈共同研究報告・資料〉

『太陽』第一卷 執筆者一覧

本一覧は、雑誌『太陽』第一卷（明治二八年分）の執筆者について、本誌記事につけられた執筆者紹介を抜き書きしたものである。抜き書きにあたっては適宜の省略を施した。雑誌の編集、記事の配列について知る参考になると考え、五十音順など配列、整理は行わなかった。なお、判読不能文字には「」を、紹介欄にことわりなき重複には、末尾に（参↓）を付した。（鈴木貞美）

太陽 1巻1号

久米邦武…字は土城易道。肥前佐賀出身。太政官書記官修史局編集官等を歴任、後に帝国文科大学教授、明治六年岩倉大使等の一行に従い米欧二州に遊ぶ。大使の米欧回覧実記は多く君の手になる。現在は職を辞して著作に従事し、その史学上の所論は多く史海等に掲載。

千頭清臣…安政三年一月一日土佐高知生まれ。大学に入り哲学および政治学を研究し、十三年七月卒業。後に鹿児島島高等中学造士館教頭、高知県尋常中学校長などを歴任。著述多し。

井上哲次郎…号は巽軒。安政二年十月筑前太宰府生まれ。幼少より近郷の諸名儒に従い漢学を攻め、また村上研次郎を師として英学を修め、明治四年長崎に赴き米人に従遊。横山又次郎巨智部忠承等諸博士と同窓。明治八年上京して開成学校に入り十三年東京大学において哲学政治学を卒業。十五年大学助教授に任じ、十七年命を奉じてドイツに留学し哲学を専修する。二十三年帰国し二十四年文学博士の学位を受け、現在帝国大学教授。著書多く東洋哲学史は最も学者の称する所となる。

坪内雄蔵…号は逍遙、春の舎。尾張名古屋の人。明治十六年帝国大学文学部を卒業、爾来

力を東京専門学校に尽くし、傍ら早稲田文学を發行して常に文学の交流を謀り、同校文学部は君の力によって成る。著書多く、小説に在りては書生氣質最も世に行われる。

三宅雪嶺…通称雄次郎。加賀金沢出身。法学士三宅恒徳の弟。明治十六年帝国分科大学を卒業、爾来哲学および文学の研究に従事、我觀小景、哲学涓滴等著述多し。日本人及び亜細亜二雑誌を發行。

上田萬年…伊予宇和島出身。帝国大学文学部に入り、明治二十一年七月、和文学科及び哲学を卒業、次いで語学研究のため大学院に入り兼ねて大学の講師となり、二十三年ドイツに留学し二十七年六月帰国し現在文科大学の教授。

坪井正五郎…長門出身。海軍少佐坪井航三の甥。帝国理科大学に入り動物学を修め十九年卒業。専ら人類学を研究し、二十年英国ロンドンに留学し帰国。現在理科大学人類学教授。

井上辰九郎…東京出身。明治二十三年法科大学政治学科を卒業。現在農科大学、学習院、高等商業学校、東京専門学校及び専修学校において政治理財学科教授。

横井時敬…肥後熊本出身。明治十三年駒場農学校を卒業、爾来久しく農事の改良に力を尽くし、産業時論、日本農業新誌等を発行。現在農科大学教授。また大日本農会の幹事。

尾崎行雄…伊勢出身。幼にして慶応義塾に学び、新潟新聞の主筆となり、後統計院権少書記官に任ず。明治十四年大隈伯大蔵卿を辞するにあたり、犬飼毅等の諸氏と共に職を辞して改進黨を組織し、爾来専ら身を政治界に委ねる。初期以来帝国議会議士に挙げられ、改進黨中の名士。

中西牛郎…文久元年熊本生まれ。幼にして漢学を平川清古岡松壘谷両氏に学び、明治十四年熊本紫溟新報に主筆となり、十七年西京同志社に入り英学を学ぶ。二十一年宗教改革論を著し次いで米国に学び、帰邦の後本派本願寺文学寮の教頭に任じ、傍ら経世博議（月刊）を発行。

森田思軒…思軒居士森田文蔵は備中笠岡出身。少時興讓館に遊び業を阪田警軒翁に受け、また慶応義塾に学ぶ。後欧州及び支那に遊びて東西の学を修め、帰国久しく報知社に在りて筆を揮い、現在国会新聞社員。小品文を善くし殊に翻訳に妙。「警使者」「探偵ユーベル」

を始め人口に膾炙する文字多し。

戸川残花…名は安宅。安政二年十月江戸牛込生まれ。父は幕府の世臣、戸川内蔵安行。慶応義塾、工部大学、開成学校等に入り、近年は基督教の教師として諸種の雑誌に關係。

福地桜痴…桜痴居士福地源一郎は肥前長崎出身。少にして江戸に来、幕府に仕え、遣西の使節に従い通辞を以て欧州に遊ぶ。維新の後野に在て東京日々新聞に筆を揮い、已にして東京府会議長。海外に遊ぶもの前後三次、専ら文墨に従事して、小説に脚本に著作極めて多し。

紫明楼主人…紫明楼主人は中川重麗君の別号。一号霞城山人。嘉永中京都生まれ。草間時福は君の弟。京都独逸学校に入り理化学を修める。久しく教育に従事し、又文辞に嫻にして現在京都市日出新聞に入り操觚に従事。

渡部千吉郎…群馬県師範学校教諭。去年九月十八日探検一行十六名と共に出発し、同月三十日に帰国。

尾崎紅葉…徳太郎と称し、慶応三年十二月江戸芝神明町生まれ。七歳にして御家流の書方を坂川氏に受け、十四歳までこの私塾にあって普通教育を受ける。十五歳第二中学校に入

り二年にして退学。十九歳三田英学校に入り大学予備門の受験に応じ、二十一歳のとき大学に進学。法科にあること一年、転じて文科にあること二年にして退学。これより先硯友社を組織し、二十四歳読売新聞の聘に應じて小説の筆を執る。二十五歳大学を出て日就社に身を容れ、現在小説を担当。

饗庭篁村…通称興三郎。号は篁村。安政二年八月十五日江戸下谷生まれ。現在東京朝日新聞社員。小説劇評その他の雑誌に筆を執る。著述多し。書肆春陽堂より出版の「むら竹」を大篇とす。向島寺島村に住み、その居を竹の屋という。

依田百川…下総佐倉藩の世臣。維新の後藩の参事となり、自ら出て文部省に官仕し、正七位に叙せられる。後職を辞して鉛槧に従事し、著述多し。もと儒流より出て詩文に精通し、余力小説脚本等の戯著、また材贈藻麗をもつて人を驚かす。小品叙事の漢文に至っては、世多く敵手を見る。

幸田露伴…海軍大尉郡司成忠の弟。幼時徳川禁令考の著者菊池松軒翁に就て朱子学を修める。爾来文学界に身を委ね、著述多数。五重の塔一篇は最も得意の作という。先年国会新

聞の創立するや村上龍平氏の知に感じ、現在も同社に従事。

志賀重昂… 矧川志賀重昂は旧三河岡崎藩士。文久三年十一月生まれ。札幌農学校卒業。後

三宅雄二郎氏等と共に「日本人」及び「亜細亜」の二雑誌を発行し国粹保存を以てみずから任ず。著書は南洋時事、日本風景論など。

石橋忍月… 通称友吉。法学士ではあるが文学者として最も著名。現在石川県金沢の北国新聞に従事。↓参考第1巻3号。

大和田建樹… 愛媛県旧宇和島藩士。学和漢洋に通じ、高等師範学校女子師範学校教授及び文科大学考典科の講師となる。著書は謡曲通解和文学史その他多数。

捻華主人… 捻華主人近藤嘉三は宮内省に仕官して送世の礼典儀式に通じ、連歌挿花香花等のことに詳しい。

幸堂得知… 初め高橋正吉郎と称す。府下谷屏風坂下町生まれ。故あって後年絶家相続して鈴木利平と称せられる。実家高橋は紅葉山上野両御宮御用達。

三島通良… 東京出身。明治二十二年帝国医科大学を卒業。直ぐに大学院入学、小児科学を専修。二十四年以来文部省の嘱託に応じて

現在学校衛生の取り調べに従事。

寒沢振作… 女子の家庭教育に最も意を用いられ、家政に関する著述多し。現在職を文部省に奉じ、兼ねて女子師範学校助教諭。

有住齋… 礼式の事に精通し、現在成立学舎女子部及び香蘭女学校において女礼式の教授を担当し、また諸種の雑誌に女礼式の講義を多数掲載、その礼式は諸家の流派に拘らず、主として神代以来の国礼に則る。

乙羽庵主人… 本名渡部又太郎。別号二橋生。明治二年六月羽前米沢生まれ。明治二十一年の秋上京し、風俗図報及び絵図叢誌に七年間主筆。その間中央新聞の編集をも兼ねる。昨年の冬より本館に入り編集に従事。

前田香雪… 名は夏繁。号は香雪。旧幕府旗下の士前田建助夏蔭翁の息子。維新の際籍を平民籍に移し国学歌文の教授、書図の鑑定等と業とする。明治八年東京絵入新聞の創立のとき聘せられて編集主任となる。新聞に図を挿入し小説を掲載するのは氏が初め。現在新聞事業を廃し美術の研究鑑定等を専らにし、二三年前より臨時全国宝物取調局監査掛委員となり、また日本美術協会の委員副長、東京彫工会の幹事兼講師、東洋絵図会の学術委員、

日本漆工会の考案委員、美術育英会の商議員、好古社の評議員、「金遂」工研究会の顧問、歌絵会の評者、東京象型鑄造業組合の顧問等に挙げられ美術社会に考案家意匠家を以て敬重される。

太陽 1巻2号

梅謙次郎… 万延元年雲州松江生まれ。上京して外国語学校を卒業、更に司法省法学校に入り卒業後直ちに同省御用掛を命ぜられる。後官命によってフランスに渡り里昂大学で法律を修めてドクトル・アンド・ロワーの学位を受け、更にドイツに赴き諸大学に歴遊して帰国。直ちに法科大学教授に任じ、法学博士となる。

坪井九馬三… 東京出身。東京大学に入り、明治十四年七月政治理財学を卒業し、更に大学理学部に入り応用化学を修め十八年七月卒業。同二十年六月留学の命を受けてドイツに渡り、柏林フリードリッヒ、ウィルヘルム大学に入り史学を専修。さらに転じてオーストリア国内ポヘミア王国フラク府及びウィテナ府の諸大学に学び、スイス共和国チューリッヒ大学

に入り史学を修める。遊学中文学博士となり、二十四年十月帰国し直ちに文科大学教授に任ぜられる。

栗原亮一…志摩国鳥羽町出身。明治七、八年の頃東京同人社の教頭となり、傍ら草莽雑誌を発行して時事を痛論。十一年一月初めて土佐に遊び、板垣伯の門を叩く。伯はこれを器とし、十五年十一月板垣後藤両伯に随て欧州を漫遊し、後事ある毎に支那及び朝鮮に遊びて形勢を視察し大坂東雲新聞に東京自由新聞に従事して自由党のために尽瘁し、帝国議院が開設されると、三重県より選出され衆議院議員となる。

飯田旗郎…内蔵助飯田巽の息子。慶応二年生まれ。東京府第一中学校、東京大学予備門、東京統計学校、高等商業学校等に学ぶ。明治二十年五月ベルギーに渡り、同国アントウェルプ市高等商業学院に入り、同二十二年七月卒業。二十三年帰国し日本銀行の役員となり、二十六年九月高等商業学校教授に転任。著書は東洋商略等数編。

曾我祐準…天保十四年十二月筑後柳川生まれ。明治元年徴士を以て出でて軍務官判事となり、次いで兵部少丞に任ず。爾後累進して明治六

年陸軍少将に任じて十年の兵役を督し、鹿児島を討ち勲二等に叙せられる。十五年参謀本部次長となり、十六年中将に進み、尚参謀本部次長を兼ね、十七年七月華族に列せられ、勲功によって子爵を得る。現在宮中顧問官正三位勲一等を以て貴族院議員を兼ねる。

手島精一…嘉永二年十一月生まれ。旧菊間藩士。明治三年米国イーストン、ラファエト大学に入り五年四月英国に赴く。八年七月帰朝して東京開成学校雇となり、九年四月文部大輔田中不二麿に随行して再び米国に渡り、十年四月文部大書記官九鬼隆一に随行してフランスに赴き、十二年帰国して教育博物館長に任ず。爾後諸職を歴任して現在東京工業学校長。

山岸藪鶯…本名は寛。明治元年野村佐野生まゝ。後上京し十九歳を以て同人社を卒業し、二十歳の夏米国に渡航しヘステイニング大学に学ぶ。後サンフランシスコジャーナル及び遠征雑誌を発行し、また桑港新報の文学上の記事を担当し、傍らクロニクル新聞の客員となる。明治二十七年帰朝し東京文学を發行。

野口勝一…常陸水戸出身。号は北巖又珂北。茨木県会議長に推され茨木日報主筆を兼ねる。

後両方を辞して東都に遊び官途に入る。傍ら明治十八年中同志と東洋絵画会を設立。現在茨城第二区より選出され衆議院議員。

眉山人…明治二年三月五日生まれ。花園女史…本名は三宅龍子。元元老院議員田辺太一氏の娘。高等女学校卒業。著書に小説藪鶯あり。三宅雪嶺に配して世伯鸞孟光の偶に比すという。

寧齋主人…本名野口一太郎、号は謫天情仙。肥前諫早出身。故松陽先生の息子。上京して哲学館に学び、後専ら詩をもって命となす。著書に三体詩評あり。

小宮山南梁…名は綏介。水戸の世臣。王父楓軒以来の家学を受け、農政地利等の学に通し、又徳川時代の歴史に造詣が深い。著述甚だ多く、幕政の時は烈公に近侍し、維新の後には東京府で市区改正の事に参し、後慶応義塾大学部講師となり、現在は家にありて鉛槧に従事。緒余の詩篇甚だ富む。

関旭巖…通称謙之。旭巖は号。豊後日出出身。少時漢学を米良東「山喬」に受け、後上京して共立舎及び同人社に学ぶ。かつて風雅新誌に石蠟子又は槎盆子の戯号で狂文を載せ、一時雑誌社会を風動。明治十四年丸由作楽翁と

謀り明治日報を発刊。同十八年司法省御用掛となり、ついで検事に任ず。二十二年枢密院書記官に転じ二十六年十月辞職。現在日報社にあり、奇文を草すること知られる。

落合直文…号は萩の家。文久元年十二月仙台生まれ。幼少より上京し専ら国文学を修める。現在第一高等学校教授。国学院をはじめ、国文学に関係ある学校はこれに臨むのみならず、家にありてもまたよく子弟を教育。国文学今日と隆盛を致したるは君の力なり。歌文に巧みに著書又極めて多数。

漣山人…本名巖谷季雄、貴族院議員巖谷修の第三子。故工学博士巖谷立太郎の弟。明治二年六月生まれ。十歳の時小学を出て訓蒙学舎、医学予備校を経て後ドイツ学協会学校に入り十九歳の時卒業。その間又塩谷青山、川田甕江、杉浦重剛等の門に遊ぶ。二十三歳の時聘されて京都日出新聞社に入り、二年間在職。昨冬再び東京に帰り、専ら本館発行の少年世界に従事。

サー・エドウィン・アーノルド…現時英国第一流の詩人。かつて「亜細亜の光」という長篇の詩を作り又かつて本邦に遊び、その風土田川的美を万国に紹介。

川崎千虎…旧尾張徳川家の藩士。幼より絵画を好み、名将勇士を画くのを樂しみとする。壮年に至って武家の故兵器の沿革を研究し、かつて藩用を帯びて京師に寓する日、画所預土佐家に就いて画法及び有職を学ぶ。廃藩の後、東京に出て現在帝国博物館に在職。有職故実の事においては世多く君を推す。

岸上質軒…名は操。万延元年浅草七軒町の旧宇都宮藩邸に生まれる。よって質軒と号す。七歳初めて漢籍を学び、十九歳より外国語学校に入ってフランス学を修め、二十一歳司法省法学生徒となり二十四歳病のため退学。明治二十三年より本館に入り編集に従事。

小原重哉…岡山県青年会委員長。巖本善治…但馬旧出石藩の人。中村敬宇の同人社及び津田仙の学農社等に学ぶ。従来廢娼論を唱え、明治十六年以来キリスト協会に属し、十八年より女学雑誌及び明治女学校に従事。昨二十七年より海外教育会発起人の一人。

加藤咄堂…名は熊一郎。明治三年十一月丹州亀岡生まれ。同志社出身、現在明教新誌主筆。

太陽 1巻3号

犬飼毅…備中庭瀬出身。号は木堂。かつて慶応義塾に学び、卒業後朝野新聞ならびに報知新聞記者。また統計院書記官に任じ、明治十四年大隈伯が大蔵卿を辞するにあたり、尾崎行雄等と共に職を辞して改進黨を組織。初期議會以来岡山県第三区より選ばれて衆議院議員。

藤沢南岳…名は恒。旧高松藩儒員東坡の子。弱冠にして箕裘を継ぎ帷を浪華に下す。維新の変勤王を唱え一藩を奨励し天下に奔走。明治八年官を辞し再び帷を浪華に下し、有為の才を教育。著書若干あり。

日下部三九郎…明治三年九月伊勢桑名生まれ。幼にして東京に出で、共立学校より第一高等学校に入り、更に帝国大学法科大学に入り、二十七年六月卒業。同年九月外交官補となり、十月朝鮮京城日本公使館詰となり、現在在勤中。

谷干城…旧高知藩の世臣。名儒重遠の孫。業を安井息軒に受け、維新以来軍務に従事し累進して陸軍中將となる。十年の役熊本に籠城し賊を破った功あり。後また農商務大臣とな

る。文勲武功極めて多し。十七年七月華族に列せられ、勲功をもって子爵を授けられる。現在貴族院議員。

黒川真頼・黒川春村の一子。文政十二年十一月江戸生まれ。父祖の業を継いで志を国学に傾け、最も史学ならびに古語にくわしくまた和歌をよくす。諸官に歴任して明治十八年文学博士となり同二十四年以来美術学校教諭となり現在文科大学教授。帝国博物館学芸委員、宝物調査委員を兼ねる。

小倉秀貫・東京出身。かつて修史局で多年修史に従事し、最も元龜天正の頃より徳川幕府の中庸に至る間の歴史に精通。深堂または後洞生の号で毎日読売二新聞に史談を掲載。

曳尾叟・曳尾叟は元老院議員田辺太一の別号。蓮舟とも号す。旧幕臣にして維新の際身をもって国事に尽くした顛末は概略本編の記事に見えたとおり。後朝に仕え累進して正四位元老院議員となる。現在貴族院議員。余暇をもって鉛槧に従事す。著書に旧幕外交談等あり。

曾根俊虎・羽州米沢の人。父俊臣は儒者で維新の際に戦死。上京して海軍士官となり明治六年副島全権大使にしたがって渡清。明治七年台湾事件が起こるや密旨を帯びて北京に至

り、大久保全権公使に面陳するところあり。

翌年清国に留まり北は天津山海関牛莊盛京より南は江浙の間に至るまで跋涉して形勢をつまびらかにす。帰国後榎本子と共に興亜会を起こした支那学校を建設。明治十六年清仏戦争に際し命を受けて清に赴き両国の動静を視察。明治十九年満期帰朝し参謀本部海軍部編纂課長に任ぜられる。清国にあること前後十有六年足跡ほとんど南北に遍く頗る清国の事情に通ず。著書に清国近世乱史、北支那紀行、支那各港史、山東紀行、満州紀行、法越交兵紀、日本外戦史、日本海軍史など。

南翠外吏・姓は須藤。名は光暉。伊予宇和島出身。久しく改新新聞社で小説を草し、現在大阪朝日新聞社にあり。緑蓑談、新粧の佳人、朧月夜、隠君子など名著多し。

石橋忍月・慶応三年筑後国上妻郡生まれ。明治二十四年法科大学を卒業。現在加賀金沢で弁護士。第一号の小伝に詭漏ありたれば正す。
(↓参考第一巻一号)
宮島春松・旧松代藩士。嘉永元年藩邸に生まれる。少時佐久間象山の門に学び東西の兵学を修め、特に心を仏学に用ゆ。維新の際、藩の兵学校の講武師となりつねに君側に侍す。

明治の初め出京、仏国人に就いて仏学を研究し深くフランスの兵書に通ず。陸軍省翻訳官となり、訳せる兵書極めて多し。音楽を好み、諸学の余暇筑紫箏能楽を学びのち悟るところあり更に隠士金井郷楯に就いて専ら雅楽を修め、のち京都奈良などの楽官に就いて遂にその蘊奥を究め、更に東西各国の楽を考えて国楽制定意を著す。現在雅楽協会を起こして専らその道の興隆に尽力しつつあり。

謫天情仙・姓は調、氏は野口、名は式、字は貫卿、号は寧齋。通称は一大郎など多数。ある一派でいうところの文学社会に顔を出すときは、この別号を用いる。六歳の時に国を出番町小学校に入校以来京に在ること二十三年。父、内閣書記官野口常共は學術よりは経世に志有ったが、本人は詩人となる。

大江敬香・敬香大江孝之は安政四年十二月江戸に生まれる。成長の後阿波徳島藩齋に入り漢学を修め、明治五年慶応義塾に入社。七年末松謙澄と共に東京日々新聞に従事。十年静岡新聞主幹、山陰新報に主幹、神戸新報主筆をつとめる。十五年参事御用掛となり翻訳を主任する。十八年より修芸社を創立し、英文学詩文章を教授し、某華族の委嘱を受けて政

務を調査し、また精美雑誌を発行して文芸に従事。

岡倉覚三…旧福井藩士。文久二年十二月生まれ。明治十三年七月東京大学毕业。文部省に出仕。十九年九月美術取調委員としておよそ九カ月間欧州出張を命じられ、便宜アメリカ巡回をも命じられ、二十年十月帰国。二十三年十月東京美術学校長となり十一月多年美術の進歩を図り同年春第三回内国勸業博覧会審査官となるや、その労効顕著なりとして藍綬褒賞を賜る。二十四年八月正六位に叙せられ、二十六年清国に航して美術取調をなす。また帝国博物館理事と臨時全国宝物取調掛を兼ね、日本青年絵画協会の会長に推される。

大内青巒…名は退。通称青巒。号は諸々居士。弘化二年仙台生まれ。文久年間より四方に漫遊し維新以後東京に在住。広く朝野の名士に交わり、しばしば任官の推薦を得るが遂に仕えず。明治五年本願寺のまねきに依じてその派内の教育にたずさわわり、以来専ら尊皇奉仏の一途に尽くす。

太陽 1巻4号

小嵐子…匿名。兵事に精通。

添田寿一…筑前広渡出身。元治元年生まれ。

上京して大学に入り明治十七年卒業、文学士となる。更に政治理財学研究のため英国に渡り、ケンブリッジ大学に遊ぶ。明治二十年帰国し大蔵省に出仕、大臣秘書官となる。現在同省書記官。

川田剛…字は毅卿、号は蘊江。備中阿賀崎出身。文学博士。諸官を歴任し、現在学士会院会員、貴族院議員。本誌前号に詳述。

関口信篤…安政五年武州川越出身。明治七年より英学を修め、ついで工部省電信学校に入り同十年卒業、三重県四日市市及び津電信分局に在勤。のち辞職して伊勢新聞記者となり、ついで三重県庁に官仕し、二十三年辞して帰京。かつて北海漁業の実況観察の志があり、高知県人林有造、島田糺氏らが三光舎を起こしてロシア領薩哈唎島漁業の航海に同乗、探検数カ月にして昨年帰国。

遅塚麗水…麗水遅塚金太郎はかつて友人幸田露伴と共に一文を草し、為に矢野文雄に知られ報知新聞入社。昨夏征清の軍に従い渡韓し、

朝鮮内地を跋涉して文物風土に通暁。

高山林次郎…乙羽庵主人大橋又太郎は同郷の人。

岡本黄石…名は迪。字は君彝、旧称半助。名臣の後を以って彦根藩の老臣となり、幕末騒擾以来最も国事に尽瘁す。また業を梁川星巖に受けて詩名有り。老後高退専ら風月に嘯傲、本年八十有五、君の配又八十、具慶壯健なり。中野秋香…天保十三年辛寅九月駿河国府中生まれ。松本直秀の私塾に入學、六年間和学を修め、また駿府明新館に入り五年間漢学を修める。慶応二年幕府の大試に応じ経歴文章及び時務策全科及第、賞揚をうけ、明新館助教となる。維新の後、教部内務文部大学に歴任し、東京高等女学校教授に任じ、転じて高等女子師範学校教授、更に第一高等中学校教授となり、眼病のために辞職。現在、高等師範学校付属音楽学校嘱託講師。

雲照律師…釈雲照律師は目白僧園の戒飾和上。真言宗中無比の高徳。法齡既に六十余歳、内外貴神師の徳風を欽慕し帰信する者日々多を加うという。次号に詳述。

加藤木重教…安政四年生まれ。旧三春藩士。明治四年旧藩主の拔擢により英学修業を命ぜ

られ、慶応義塾に四年間学び、同八年より十年まで旧工学寮で電気学を修め、同十年より二十一年まで逓信省に奉職。その間十六年より同省電気試験所に於て故志田博士に従い専ら電話機に関する研究主任。二十一年辞職、自費によって渡米、専ら電気工業を実習し二十四年帰国、雑誌「電気之友」を発行し現在深川電燈会社技術長、三吉電機工場技師、電気学会評議員。

太陽 1巻5号

南熊夫…慶応二年河内金剛山下生まれ。明治十二年京都同志社に入り十七年卒業。十九年三重県尋常中学校教師となる。二十二年渡米、ミシガン州オリベット大学文学部入学、二十六年卒業し、後エール大学に転じて哲学を修め、二十七年十月帰国し、現在芝公園内正則尋常中学校教師。

松村介石…播磨出身。号は容膝堂主人。東京明治学院に学び、北越学館の校長となり、明治二十六年より東京基督青年会講師となる。著書多し。

長田秋濤…本名長田忠一は故公使館書記官長

田「金圭」太郎の子。パリに七年余り滞在。フランスの風土に通じ、特に劇部の事情に精通。明治二十六年帰国の後、わが国演劇改良に尽力、演劇改良会を設立。

西岡宜軒…易道久米先生満清亡兆論の著あり。考據的確、議論深透、其清国亡滅の徴を具有するを論ずる頗る至れり。宜軒先生これを読みて所感五絶句を賦す。既に易堂先生の論評となり、湘雲寧斎諸家の唱和となり、贈古梅先生となり、ついに重読三読諸詠となる。

平山鏗二郎…尾張名古屋出身。文学士藤岡作太郎と共に日本風俗史の著作で知られる。

桜井綱斎…備中高梁出身。明治四年八月生まれ。明治二十六年東京専門学校文学部卒業、同年七月より本館に入り爾来編集に従事。

塚原蓼洲…通称靖。別号渋柿園。旧幕府の人。東京日々新聞で編集の傍ら小説を執筆。

一葉女史…本名樋口夏子。明治五年東京生まれ。中島歌子女史を師とし、武蔵野、都の花、文学界などの諸雑誌に新作の小説を発表。

佐々木信綱…故佐々木弘綱翁の長子。明治五年六月伊勢国石薬師駅に生まれ。六歳で松坂に移り爾後父に伴われて諸国を歴遊。明治十五年東京に移住し同年御歌所長高崎正風の門

に入り歌を学ぶ。同十七年文科古典科入學。同二十一年卒業。同二十四年父が死去し家を嗣ぎ、歌の著作、教授に専念。その道の拡張をはかる著作編集の書多し。

太陽 1巻6号

小西増太郎…岡山県岡山市出身。ロシアの宣教師ニコライ氏に就き、ロシア語を六年間学ぶ。明治二十年春、西特命全権公使にしたがい、ロシアに航し、まずキエフ府神学大学で神学士の学位を得、のちモスクワ府文科大学に入り哲学史及び心理学を専攻、傍らロシア文学を研究し、又支那哲学書のロシア語訳に従事。明治二十六年暮れ帰国。

天野為之…佐賀県士族。明治十五年帝国大学を卒業、文学士となる。政治経済学で有名。

著書に、経済原論、高等経済原論、日本歴史、万国歴史、日本地理、小学修身経など。いずれも十数版を重ねる。第一期帝国議会に郷里佐賀県より選出され、得意の経済論によって大いに気炎を吐く。議会解散後、選挙干渉のため落選。爾来専ら著作と教育とに力を尽くし、現在東京専門学校を主とし、その他多数の官私立学校の教員。

板垣退助…土佐高知の藩士。維新の役で各地に転戦して功あり。累進して参議となる。明治六年征韓の議廟堂に破裂するや、亦合わずして去る。爾後民権拡張国会開設などに尽力し、自由党を組織してその総理となる。国家に尽くした功勞により伯爵となる。

加藤弘之…但馬出石出身。天保七年六月生まれ。嘉永五年江戸に來り佐久間象山の門に入り兵学を講じ、後大木忠益に就いて蘭学を修め、後また独仏英の学を修める。維新の後職を文部に奉じ文教に尽力したまた国典制定に参与し大功あり。大学大丞、侍読、一等議官、大学総理、元老院議官に歴任。二十一年文学博士の学位を受け勲二等に叙し、のち帝国大学総長、現在学士院会員、貴族院議員。

田中從吾軒…名は參。從吾軒は号。旧佐倉藩の碩儒。古詩古文を能くす。経学はその本領にして他に及ぶ者無し。

竹翠隱士…本名磯野徳三郎。福岡県出身。明治十一年七月東京大学化学科卒業。専門の緒余教育に従事し、また文学を好む。無腸道人、依緑軒などの号で雑著に富む。著書依緑軒漫録など。

採菊散人…本名條野。通称伝平。旧の号は

山々亭有人。東京市日本橋区长谷川町に生まれる。明治元年福地桜痴居士とともに江湖新聞を編し禁止となり、同五年二月東京日々新聞を起こし久しく日報社に身を置くが同十九年やまと新聞を起こして以来同社を主宰。幕府の世盛りより小説家として存在するは君一人なり。

三味道人…宮崎三味。(本人の弁) 履歴という程のものこれ無し。漢学者の家に生まれる。東京日々新聞に執筆を始め、やまと新聞、東京電報、大阪朝日新聞に執筆、現在東京朝日新聞記者。

太陽 1巻7号

神藤才一…仏国法律博士。専門は外交学。詳細は前号参照。(第一巻第六号、一九一—一九二頁に「外交学者神藤才一氏」として紹介文がある)

水野遵…旧名古屋藩士。嘉永三年十二月生まれ。明治四年官命により清国に留学、六年清国視察、七年六月台湾事務都督西郷従道随行を、地方掛分課となり、また知勞棗分屯出張同九月台湾府に派遣される。明治十六年参事

院議官補、十八年法政局参事官。二十二年臨時帝國議會事務局書記官を兼任。二十四年四月、私費洋行の序をもって欧米議會の現況と事例取調を衆議院より囑託され、同十一月帰国、衆議院書記官に任じ、二十五年一月書記官長。本年(二十七年)五月七日弁理公使に転じ、台湾受取委員として同二十四日出発。

伊藤為吉…三重県出身。明治十八年カリフォルニアに航し建築学及び実地建築を研究し二十二年米國建築師となり帰国。その後造家学会会員となり建築実業に従事、二十四年濃尾震災に際し大いに感ずるところあり、鋭意苦心の末遂に耐震家を發明し、また水害地適用户家屋、防火家屋などの新意匠を案出。著作は木工術教科書など数種あり。

藤田精一…京都府出身。帝国大学に入り国史科を修め明治二十七年七月卒業、ついで大学院に入り現在研究生。

小金井喜美子…医学博士森林太郎の妹、医学博士小金井良精の妻。兄と同じく内外の文学に精通し、柵双紙、国民之友などに名編多し。中島力造…丹波福知山出身。安政五年生まれ。明治三年頃より神戸大阪京都の各地で英学を修める。明治十年渡米し中学及び高等学校を

卒業、エール大学に入學、ドクター・オブ・フィロソフィーを得、のち同大学の哲学講師。更にイギリス、ドイツに遊學し、明治二十三年帰国。直に帝国大学講師となり二十五年教授。

牧野伸顯…右大臣大久保利通の次子。出でて牧野家を継ぎ、諸官に歴任に現在文部次官。

和田垣謙三…丹後旧豊岡藩士。万延元年七月十四日生まれ。幼少より読書を好み漢籍を藩儒久保田精一に学び、明治四年よりドイツ語を菊地武文に学ぶ。翌年上京し専らドイツ語を修め、六年東京外国語学校に入り後開成学校でドイツ語鉱山学を修める。さらに英文を修め、十一年東京大学文学部入學、文学哲学經濟学を修め、十三年七月卒業し文学士。同年官費生として英国に渡り、ロンドン大学、ケンブリッジ大学、キングスカレッジ等に学び、のちまたドイツに遊びベルリン大学入學。十七年五月帰国し、現在法学博士として法科大学教授兼大学評議員。

大陽 1巻8号

大石正巳…土佐旧高知藩士。かつて弁理公使

として朝鮮に駐在、防殺事件を結了して帰国。稲垣万次郎…肥前旧島原藩士。かつて海外に漫遊し、帰国ののち東方策を著述。

吉村銀次郎…石見旧津和野藩士。慶応三年九月生まれ。慶応義塾、東京法学院などに学び、明治二十三年北米合衆国に遊びシガン大学に学びマスター・オブ・ロース及びカンセロル・アト・ローの学位を得て二十六年一月帰国。同年三月植民協会設立に際し評議員となり同年六月宮崎県中学校長、昨年(二十六年)八月中学校長を辞職。

桜井平吉…長野県出身。嘉永六年五月生まれ。夙に自由民権の説を主張し、国事犯をもって二回投獄される。這回の発明も獄中にて考案するという。既に白色漆と鹵解舒法の二つの発明があり、いずれも実業家の喝采を博す。在獄中、解難録及び天賜録の二編の著述がある。昨年(二十六年)府下第十一区代議士候補に選ばれたが、当時火薬試験多忙の故これを辞し、現在も製糸と火薬の事業に従事。

若山由五郎…工科大学に入り冶金学を修める。東京化学校を開設し、また民間の実用のため若山分拆所を設置。また工科大学教授と工手学校その他の嘱託講師を兼ね、また博士学士

工芸家の組織である工談会副会長。今や、冶金分拆学の泰斗。

石川千代松…旧幕府の人。十二、三歳の時より蝶類を採集しその種類の多さとその習性の奇なること等を見て最上の業とする。後東京大学に入り動物学を専修し明治十五年卒業、同校にて三年間助教。後ドイツに渡り進化論の泰斗ヴィスマン師の教室に四年間留まりドクトルの学位を得。二十五年理学博士の称号を得る。著書は進化新論、動物学教科書など。

湯本武比古…長野県出身。明治七年長野師範学校を卒業、九年上京、同人社に入り、十一年同社を卒業、十二年東京中学師範学校に入り十六年卒業、東京師範学校講師となり、翌十七年文部省編集局在勤。十九年明宮殿下御教育掛となり、二十年学習院教授。二十二年ドイツ留学を命じられベルリン大学で学ぶ。二十六年帰国し翌二十七年高等師範学校嘱託講師。著書は新編応用心理学、新編教育学、新編教授学など。

西村貞…旧足利藩士。安政元年生まれ。足利学校に学び明治三年藩の貢進生として大学南校に入り理科を専攻。八年開成学校(南校改

称)を退き、東京英語学校教諭となり、九年大阪師範学校長に転じ、十一年文部省の命により師範学校取調として英国に渡航、十三年帰国。十四年体操伝習所長、十八年文部省書記官となり、爾来教育に尽力し、第五高等中学校教頭、文部省視学官、文部省参事官などを歴任、二十五年辞して専ら大日本教育会に尽力し、現在同会常議員議長。

渡辺龍聖…新潟県出身。明治二十年七月東京専門学校英語専修科を卒業、同年九月帝国大学文学部入学、二十一年渡米し同月ミシガン大学文学部入学。二十二年ヒルスデール大学に転じ二十四年六月卒業、パチェラー・オブ・フィロソフィーの学位を受け、同年十月紐育州コーネル大学大学院入学、二十五年マスター・オブ・フィロソフィーの学位を受け、二十七年ドクター・オブ・フィロソフィーの学位を受け、同年十月帰国。

太陽 1巻9号

島田三郎…嘉永五年江戸生まれ。旧幕府の人。はじめ沼津兵学校に入り英学を尺振八に学び、のち横浜で勉学自修す。のち元老院書記官か

ら文部省に転任し、職を辞して大隈伯らと共に改進黨を組織。初期以来の代議士にして、現在衆議院副議長。

河島醇…旧鹿児島藩士。かつて大蔵省参事官としてフランス、パリに数年間留学、最も財政の事に長ず。立憲革新党の常議委員にして、衆議院議員。

大岡育造…長州小串村出身。安政三年生まれ。弁護士中錚々の名あり。現在中央新聞社長、国民協会常議員。

重岡薫五郎…伊予国喜多郡内子町出身。明治十一年パリ大学入学、法律学、経済学を修め、明治二十四年卒業、法律博士の学位を得、翌年十月帰国。翌年京都第三高等中学校教授。

二十七年辞職、衆議院議員の候補者として二月の総選挙に当選。弁護士を兼ねる。

福羽美静…石見国旧津和野藩士。学を野々口隆正にうけ、夙に勤王の志あり。維新の初参与に挙げられ、諸官を歴任し元老院議員となり、国会開設に及び貴族院議員となる。勤功により華族に列せられる。著述多し。

大島圭介…播磨生まれ。旧藩士。維新の際兵を率いて討幕軍に抗す。後、清韓両国駐在全權行使となり、尊俎折衝の功を奏し、帰国す

るや枢密顧問官に任ぜられる。学士院会員。著述多し。

大拙居士…姓は鈴木。鎌倉円覚寺にあり、宗演禪師門下の敏才と称せられる。

太陽 1巻10号

金井延…慶応元年三月遠江国生まれ。幼少時に上京し諸校に学び、明治十四年東京大学文学部入学、政治学理財学を専攻、十八年六月卒業する。なお留まって研学する。十九年七月、官命をもってドイツに航し、ハイデルベルヒ^{ベルリン}大学に入り経済学、憲法、行政法、国際公法を修め、二十年ハレー大学に移り純正経済学、応用経済学及び行政法、理論倫理学を修め、二十一年ベルリン大学に入りワクエル、シモレル、グナイス、ケルケラー、トライツケ諸氏に就いて経済、財政、国法学、民法及び史学等を研修し、二十二年に英国に転学し、二十三年十一月帰国し直ちに法科大学教授に任じ、法学博士となり、貨幣制度取調委員を命ぜられ、その他講師の学校に講授す。安岡雄吉…旧高知藩士。幼少時慶応義塾を卒業、また開成学校に学ぶ。のち独学すること

多年、一時内務省御用掛となり、後大同団結の機関新聞たる正論の主筆となる。また、高知県選出の衆議院議員を勤める。

干河岸貫一…桜所居士干河岸貫一は磐城国三春出身。幼少時平藩神林某に漢籍を学び、後羽前に漫遊し、明治六年初めて上京し、同九年より日報社の客員。絵入日曜新聞と題する毎週刊行雑誌を発行。これは石版画を雑誌に挿入した初め。明治十年大阪日報の記者となり、十三年同社を辞し帰京後日報社の編集に従事。同十八年退社、十九年より大阪朝日新聞社員となり東京通信を担当。著書に日本立志編、女史善行録等数部あり。

久松義典…伊勢桑名出身。号は狷堂。栃木県師範学校長を辞職後、報知新聞、大阪新報、朝野新聞の記者をつとめる。明治十九年より同二十一年まで東京府会議員となり、第一期衆議院議員候補者となる。のち北海道に遊び同地毎日新聞に助筆し、帰京後専ら北海道の事業を計画す。

安藤不二難…明治四年正月、大分県臼杵生まれ。清国に遊び、支那帝国地誌及び支那漫遊実記などの著書あり。明治二十六年十月同県人松川実とともに漁舟で朝鮮海に航して漁業

を探検。

松川実…東京水産伝習所を卒業。今年（明治二十七年）二十四歳。

江見水蔭…明治二年備前岡山生まれ。少時東京に遊学し、杉浦天台道士の門にあり、のち海内を漫遊すること一年、最も短編に長じ、また脚本を作る。目下中央新聞に執筆中。

（前号の記述に追加）

松田学鷗…名は甲。福島県若松出身。詩を槐南寧齋諸人に学び、青年作家の目あり。陸軍陸地測量部に在職。現在台湾在住。

太陽 1巻11号

元田肇…大分県出身。法学士。衆議院議員となり、初期の議会より今に至り、議員中錚々の称あり。現在、国民協会一方の驍将。また弁護士として精勉、故岡山兼吉と共に双壁の名あり。

小松緑…幼少より漢籍を好み、のち英学を慶応義塾で修める。さらに北米に渡り諸大学に歴遊。エール大学で法学士を、プリンストン大学で文学博士を得る。法学のほか政治と歴史を専攻。

田口卯吉…安政二年四月江戸生まれ。旧幕府の人。東京経済雑誌ならびに史海を発行し、経済論及び歴史論を以て顕る。現在東京府選出の代議士。

中根寿…会津出身。札幌農学校を卒業後、横浜「ジャパン・メール」新聞社に入り編集に従事。現在専ら著作に勉めるといふ。

清水政次郎…東京出身。明治十五年東京大学予備門を卒業、十七年カリフォルニア州立大学にて水理学専科を修め、さらにサンダウエイ実地工業専門学校にて実地水理の全科を卒業。二十三年帰国、二十四年相州須雲川の水力を使用して現在の箱根水力電灯を設計し、二十六年風車機関を發明して専売特許を得、また下総印旛郡深間村排水工事、信州松本水力電灯などを設計し、二十七年伊勢山田辺近傍の畑地へ宮川の水力を利用した灌漑を設計。

松本操貞…弘化三年上野出身。白瀬校の門に入り琴三絃などを学ぶこと十年、尚鍼治学校に入り鍼治の術を修める。業成りて下野足利において琴曲三絃鍼治を営み、その間大河内清香に就いて和歌及び国語学を学び、川上広樹に皇典及び経学を学ぶこと十余年、のち宇都宮で下野盲人教育会を起こし、上京し盲

人教育のために日本当道会を組織し、現在音楽和歌及び国語の教育に従事。

三島中洲…号は毅、字は遠叔。旧備中松山藩士。はじめ桐南と号し、後中洲と改める。学を山田方谷に受く。また斎藤拙堂に伊勢に從游。維新の後上京し二松学舎を開く。後東京大学教授、大審院検事などに歴任し、現在学士院会員、帝国大学講師。

太陽 1巻12号

元良勇次郎…摂津旧三田藩士杉田泰の第三子。安政五年生まれ。後、元良家を継ぐ。明治二年郷里で英学を修め、明治八年新島襄が西京に同志社を創設するにあたり直ちに入学し、卒業の後東京に遊学し、十六年哲学研究のため渡米、ボストン大学に二年在籍後ボルチモア府ジョンズホプキンス大学に入り実験心理学で有名なスタンレーホールに就いて学び、専ら社会学を修める。在籍三年で同校のフェローに選ばれ、後フェロー・バイ・コーテンとなり、哲学博士の学位を得、二十一年七月帰国、直ちに帝国大学嘱託講師となり精神的物理学を教え、二十二年文科大学教授とな

り心理学を教える。二十四年八月文学博士の学位を得る。

渋沢栄一…江戸出身。一橋慶喜公に任用され、海外に派遣され、その事情を観察する間明治維新となり、帰国して慶喜公に従い静岡に移る。後新政府に入り累進して大蔵省三等出仕となり、井上大蔵大輔を助けて最も治績あり。しかし、明治六年当時の政府と意見が合わず、井上大輔と共に野に下り、爾来二十余年身を実業界に委ねる。現在、第一国立銀行頭取、東京商工会議所の会頭。その他全国各地の多数の会社の重役を勤める。

田中政次郎…前編掲載の後、清水から田中に改姓。

渡辺霞亭…名は勝。美濃出身。初め東京にあり某新聞の編集に従事し、後大阪朝日新聞入社。現在同紙上に小説の作多し。関西小説家中の白眉と称せられる。

南新二…通称谷村要助。天保六年江戸下谷生まれ。生家は幕府の小吏で茶道を職とする。家業を継ぎ春育と云ったが、幕府の末年撤兵隊に編入され幾もなく指図役に進んだが、維新の際商に帰しその後某会社に入ったが耳疾のために辞し、絵入新聞両文社の記者となる。

後同社を去り日報社に入り、またやまと新聞社に入社。戯作の名を南新二と号するのは一時南新堀二丁目に住んでいたためという。近年中風症に罹り歩行自在ならざるも、病床にて常に筆硯を廃せずという。